Osaka University Knowledge Archive

Title	ロシア正教古儀式派ヴィグ共同体のイコン美術 : 木彫イコンを中心に
Author(s)	宮﨑, 衣澄
Citation	大阪大学, 2006, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/46692
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【8】

氏　　名	宮　崎　衣　澄（みやざき いずみ）
博士の専攻分野の名称	博　士（言語文化学）
学　位　記　番　号	第　２０４６１　号
学位授与年月日	平成 18 年 3 月 24 日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当 言語文化研究科言語文化学専攻
学　位　論　文　名	**ロシア正教古儀式派ヴィグ共同体のイコン美術－木彫イコンを中心に－**
論　文　審　査　委　員	（主査） 教　授　津久井定雄 （副査） 教　授　ディボフスキー, A　　助教授　ヨコタ村上孝之

論　文　内　容　の　要　旨

研究の目的と意義

本論文は古儀式派ヴィグ共同体（1694-1850 年代）の木彫イコンを分析することにより、共同体の生活や宗教観の一端を明らかにしようとするものである。研究の分野はロシアの古儀式派研究に属している。日本で周知の分野にあてはめて述べるならば、宗教史学、美術史学、宗教民俗学の一角に位置づけられよう。本論文は古儀式派研究において今日までほとんど研究対象とされたことのない木彫イコンを主要な対象としている。これは非常に狭い分野に見えるが、木彫イコンにも古儀式派や研究対象としたヴィグ共同体の特徴が表れており、これまでとは異なる視野を提供するものである。このように主に木彫イコンに焦点をあてるとしても、その分析が意味を持つためには、古儀式派そのものの概略やヴィグ共同体の特徴を把握することが前提になる。しかし、近年古儀式派研究がさかんになってきているとはいえ、本論文の基礎とするには十分であるとはいえず、まして帝政ロシアやソ連時代の視点で行われた研究をそのまま転用するわけにもいかない。従って古儀式派の基本資料の再考も本論文には欠かせないが、結果的にこの部分も、日本での古儀式派研究全体に大きく寄与するのではないかと予測している。

本論文でとりあげる古儀式派は、無司祭派のヴィグ共同体である。ヴィグ共同体は、古儀式派信仰の正統性をはじめて理論的根拠をもって主張したことに端的に表れているように、教義的に高い水準にあり、その後の無司祭派信仰のモデルになった。約 150 年間にわたって宗教面のみならず経済面、文化面でも大いに発展し、多くの古儀式派共同体の中で影響力を誇った。東方正教会においてイコンとは、それ自体が崇敬の対象となる、信仰のかなめとも考えられる聖像画である。イコンは、正教の信仰上非常に重要な役割を担っているため、儀軌とよばれる規範に則して、修行を積んだイコン画家が描くべきものとされている。ところが現実にはノヴゴロド派、モスクワ派などと称されるように、制作地域や時代によって題材の選択にも偏りがあり、聖人の描写法や背景のモチーフなどにもしばしば地域性や思想上の特徴が表現されている。それゆえヴィグ共同体に関しても、共同体のイコンのテーマやモチーフに、共同体の思想上の特徴や変遷が反映されているのではないかと考えられるのである。イコンといえば、普通はテンペラ画のイコンやフレスコ画のイコンを指すが、ここではテンペラ画のイコンを視野に収めつつ、木彫イコンを分析の対象とする。木彫イコンは主に墓碑用として制作されたイコンであり、テンペラ画に比べると技法が素朴で芸術性が低いために、これまでほとんど研究の対象にならなかった。しかしヴィグ共同体に関するかぎり、テンペラ画のイコンの現存数がわずかであるのに対して、木彫イコンは 200 点以上現存している。木彫イコンは墓標用であるために、葬送

儀礼のモニュメントとして、宗教観も表れやすいと考えられる。これらが木彫イコンを取り上げる理由である。

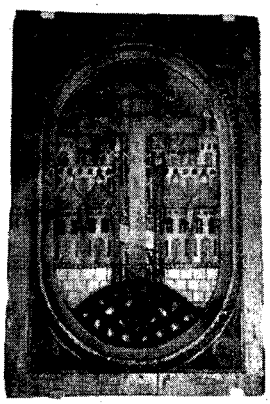
論文の構成と内容

本稿の構成は次のとおりである。第一章「古儀式派とは」では、総主教ニーコン（在位 1652-1666）以前の教会文書改革の歴史を踏まえて、ニーコンの改革の性質と内容について考察した。ニーコンはそれまでスラブ語の写本に基づいて行われてきた教会文書修正の歴史に反して、新しいギリシア語の印刷本をもとに典礼書の修正を行った。その理由としてスラブ語の写本の不足やギリシア正教会全体の支配者になるというニーコンの野望、さらには総主教イオシフの時代にすでに改革の方向性が決まっていたとする説をとりあげ、ニーコンの改革の理由がいまだ謎に包まれている部分が多いことを述べた。いずれにしても、ニーコン総主教の時代のロシア皇帝であるアレクセイ帝がキエフ出身者によるロシア典礼書改訂を後押ししていたことは確かであり、ニーコンの独断による改革ではなかったことを指摘した。次に古儀式派の各宗派について、教義の違いを中心に特徴を述べた。無司祭派が細かく分派に分かれていった最大の理由は結婚に対する見解の相違からであり、無司祭派の教義が柔軟なものになっていくにつれて、反対する分派が形成されていった。現在では結婚に対して柔軟な宗派では比較的多くの信徒を擁しているが、結婚に厳しい宗派は信徒数が激減し、存続が危ぶまれる宗派も多い。司祭派は、どのような司祭を容認するかという意見の相違によって分派に分かれる。現在多数派を占めているのはベロクリニッツァの位階をうけいれた司祭派である。

第二章「ヴィグ共同体」では、ヴィグ共同体の設立から閉鎖までの歴史を概観し、共同体と政府との関係に留意しつつ、共同体繁栄の要因を検証した。ロシア北部地方が古儀式派信仰を受け入れやすい土地柄であったという地理的背景に加えて、A. デニーソフをはじめとするヴィグ創設者たちの並々ならぬ努力と能力によって、古儀式派信仰と無司祭派信仰の教義と基盤が確立され、共同体の礎が築かれた。国家教会との宗教論争や元共同体住民の密告、国家の古儀式派対策委員会によって派遣されたサマリンによる共同体の調査など、国家政権側から様々な圧力を受けたが、ある程度の妥協と地域の協力のおかげで上手く切り抜けることができたため、致命的な迫害を受けないで繁栄することができた。一般に閉鎖的とみなされている古儀式派であるが、ヴィグ共同体はモスクワやペテルブルグ、アルハンゲリスクなどとも交易があり、共同体内で完結するのではなく比較的積極的に外部と交流していたことが、経済的、文化的発展の要因としても数え上げられる。

第三章「ヴィグ共同体のイコン美術」では、ヴィグのテンペラ画のイコンについて、アヴァクームの言説と比較しつつヴィグ指導者のイコン論を分析した。アヴァクームとヴィグ初期の指導者のイコン論はほぼ同じ内容であり、古来のイコンの伝統を変えず、イコン画家の創作性を排除するようにすべきであるというものであった。しかしヴィグ共同体ではポモーリェ派といわれる独自のイコン流派が形成されており、ヴィグ派独自の特徴があったと考えられる。そこでヴィグのテンペラ画のイコンに着目し、ポモーリェ派のイコンの特徴を分析した。ヴィグのイコンの初期の作品では、髭の描写など古儀式派信仰の内容が強調されていたが、時代を経ると背景にコケや草など北部ロシアの自然描写や、聖人の顔色や体格が変化するなど地域のイコン流派である北方派の影響がみられるようになった。この北方派の影響を受けつつも、背景の金色や細部までの緻密な描写、板の枠の緑と朱色の縁取りなどに、ヴィグ派の高く繊細な技術を発揮している。

アーチ２



楕円

第四章「木彫イコン」では、ロシアの各美術館に保存されているヴィグの木彫イコンと写真資料から、木彫イコンの図像上の特徴を分析した。木彫イコンは八端の十字架、ゴルゴダの丘、アダムの頭、槍と杖、という基本的な構図は共通しているものの、それ以外の描写は多様である。はじめに十字架周囲の構図から円、楕円、アーチ、聖堂、その他のパターンに分類し、その中でも描写が似通っているものを取り上げてさらに細かく分類して特徴を述べた。また楕円とアーチ２に属するイコンにおいて、ゴルゴダの丘やエルサレムの描写、槍と杖の形、板の装飾文様などの特徴が共通しているため、同じ職人集団によって制作された可能性があることを指摘した。次に楕円とアーチ２のイコンには基本要

素以外に多くの装飾が施されていることから、これらの装飾文様のモデルについて考察した。木彫イコンの装飾文様はヴィグの写本装飾や銅製イコンの装飾にも見られ、ヴィグでは素材や手法が異なっていても、互いに影響しあい共通の描写上の特徴を持つことが明らかになった。さらに木彫イコンに影響を与えたと思われる写本装飾に着目すると、1680 年代に流行したモスクワ・バロックの銅版画との類似が認められる。三章で指摘したように、初期のヴィグ指導者はイコンを古来の手本に従って描くようにと述べているが、伝統を継承するだけでなく、モスクワの新しい芸術潮流も摂取し、ロシア北部の影響を受けいれて、これを独自の様式に昇華させる柔軟性が見られる。一方木彫イコンの用途に着目すると、木彫イコンは墓碑用に制作され、柱型墓標に設置されることが多かったのだが、この柱型墓標の起源はキリスト教受洗前の祖先信仰にあり、キリスト教化の過程で墓標上に収められていた先祖の遺骨にとってかわってイコンが出現したとされている。これらのことからヴィグ共同体の文化は、古儀式派思想を基盤として、モスクワの新しい芸術や北部ロシアの伝統的な農民文化など様々な要素を巧みに取り入れて形成されたといえる。この共同体外部に対する柔軟な対応こそが、ヴィグ派の高い技術と芸術性の最大の要因であり、共同体発展の原因ではないかと考えられる。

結論

ヴィグ共同体のイコン美術は、イコン画家や職人が受けた影響を如実に物語っている。宗教がその土地の影響を受けて変化するのは自然な流れであるが、ヴィグは北部ロシアのみならず、モスクワやペテルブルグなど都市の近代文化とも密接に関わっている点において、無司祭派の一般的な概容とは異なっている。

古儀式派はロシアの歴史の中で様々な捉え方をされてきた。政権側からは封建体制に反対する反政府的組織として、農民や商人層からは、西欧化へとひた走るロシアにおいてロシア古来の伝統と習慣を保持していて、古きよきロシアへの郷愁を誘うものとみる視線もあった。社会主義時代の閉鎖的環境から開け放たれ、一気にグローバル化、国際化へと進む現代のロシア社会においても、古儀式派に改宗する若者の姿がみられる。古儀式派は、ロシアの急速な変化に危機感をもち、伝統回帰をめざすロシア人から支持されているように思われる。この古いロシアの伝統の代名詞ともいえる古儀式派も、時代の流れを受けて確実に変化を続けているのである。

論文審査の結果の要旨

本論文は、ロシア正教古儀式派ヴィグ共同体の宗教思想と諸活動の一端を、木彫イコンの分析によって照らし出そうとしたものである。

前半部分はヴィグ共同体イコン論への導入部として置かれており、ニーコンの改革の背景、古儀式派分派形成史、ヴィグ共同体の特色を論じている。論文全体の主題の提示がいささか不充分なので、一般的な古儀式派史の焼き直しにも見えかねないが、主軸は、正教的正統とそれに齟齬することのある実態の問題にある。すなわち、ニーコンの改革の正統性をめぐる問題点（とくに古儀式派が重視する典礼改革の問題）、古儀式派分派形成史における婚姻の是非に関する教理解釈的議論などについて論じ、ヴィグ共同体に関しても、そのすぐれた教理解釈能力とともに、イコン販売による活発な交易などの現実的な活力を強調している。必要に応じて、ヴィグ共同体に直接関わる文献資料によって引証を行っている。

次のテンペラ画イコン論も基底には正統と実態の問題がある。『ポモーリェの返答』は、正統的画法に反する写実的画法をニーコンによる改悪に帰しているが、本論文は、それがニーコン以前からのものであることを、16 世紀の教会文書の記述との比較やイコンの実作に基づいて論証し、それとともにヴィグ共同体のイコン画も新潮流の影響を免れてはいないという実態を指摘している。

このように共同体の状況を論じた後で、本題の木彫イコン論に移ってゆく。この章は、多量の資料収集とその綿密な分析に基づいて執筆されている。従来の木彫イコン研究は美術館ごとに分断されて行われ、部分的なものであったが、本論文は、ペテルブルグの 3 美術館保管の木彫イコン計 200 点をとりあげており、ヴィグ共同体木彫イコンの全体像の把握に大きく貢献するものとなっている。収集は、著者自身が筆写と写真撮影によって行っている。イコンの

背景枠と描写要素の分類をもとに共通性の高いイコン群を絞り込むことによって分析し、結論として、特定様式を継承する職人集団が存在していたこと、細部パターン選択の自由度、モスクワで新流行の写本装飾の影響などが彼らの木彫イコンの特色であることを述べ、さらに、共同体生活における個人的自由度の存在、芸術的新潮流の摂取といった実態を推測する。

本論文は、上に述べたように主題提示が不十分なので全体構成を捉えにくいという問題点があるものの、資料的に乏しいヴィグ共同体研究に、貴重な資料の詳細な分析によって新たな知見を加えるものであり、すぐれた専門的成果を収めている。

以上のように、本論文は博士（言語文化学）の学位論文として十分価値あるものと認められる。